

聖書:第一列王記10章14~29節

説教:ソロモンの心に授けられた知恵

はじめに

ソロモンが父ダビデの跡を継いでイスラエルの三代目の王となったのは、彼がまだ十九歳の時でした。経験もなければ有力な後ろ盾もいません。どうしたらよいのかと足がすくむような不安の中で、神に祈っていたとき彼は夢の中に現れた神からの問いかけを聞くことになりました。「あなたに何を与えようか。願え」ソロモンはこう答えます。「善悪を判断してあなたの民をさばくために、聞き分ける心をしもべに与えてください。」この願いは主の御心になうところとなり、主はソロモンに知恵と判断の心を与えると約束されました。

こうしてソロモンは神の知恵をもって国を治めることになり、イスラエルは歴史上最も繁栄した時代を迎えます。ソロモンのことはあるときシェバの女王の耳にも聞こえてきました。うわさが本当かどうか、是非この目と耳で確かめたい。二千キロの道のりをもものともせず、ソロモンに会いに行く。そしてたくさんの難しい質問を試してみた。そうするとソロモンは驚くべき知恵をもってすべて明確に答えた。そこで女王は確信しました。イスラエルの神は目には見えないけれど確かに生きておられ、いまここに御臨在しておられる。そのようにして女王は、主こそ唯一の神であると告白して自分の国に帰って行きました。

それが前回までのあらすじです。今日の箇所にはソロモンがどれほど富んでいたか、そのことが詳しく説明されていて、これが私たちにどんな関係があるのかと疑問に思うくらいです。でも大いに関係がある。それがどんなことなのかこれから見てまいります。

1 ソロモンの栄華

1) 金(きん)

ソロモンがどれだけ富んでいたか、いろいろありますが二つのことに目を留めます。一つは金(きん)、もう一つは馬のことです。まず1節を読みます。「一年間にソロモンのところに入って来た金の重さは、金の目方で六百六十六タラントであった。」現在であれば一千億円ほどの価値なるそうですが、時代が違いますので単純に比べることはできません。当時の価値は、この後に書かれていることを見るとわかります。六百シェケルですから、およそ7キログラム弱に相当しますが、それだけの

金を使って大盾二百を作りました。ほかにも三ミナの金、およそ1.7キログラムに相当しますが、それで三百の大盾を作って、全部レバノンの森の宮殿に置きました。戦争のためにではなく、王宮に関する行事で使うための装飾品として使われたということです。王が座る椅子は象牙で作られ、それに純粋な金をかぶせました。宮殿で用いる器はすべて金製品です。このように海外から金がどんどん輸入され、短期間の内に超大金持ちになっていく。文字どおりバブルの絶頂期を迎えました。

2) 馬

次に28節を読みます。「ソロモンが所有していた馬は、エジプトとクエから輸入されたもので、王の商人たちが、代価を払ってクエから手に入れたものであった。」

イスラエルには山羊や羊、牛、驢馬はいますが、馬はいません。欲しいというのならエジプトかクエから輸入するしかない。クエは今のトルコ共和国にあたります。馬は物とは違いますから、目利きが直接見てからでないと買えません。傷や病気がないか。よく訓練されているか。力があるか。物怖じしないか。わざわざ現地に行って確かめる。お金はたっぷりとありますから優秀な馬を買っていきます。

3) 富と知恵

いまソロモンがどれだけ富んでいたのか、金と馬の二つのことを見ただけでもよくわかります。23、24節にもこうあります。「ソロモン王は、富と知恵において、地上のどの王よりもまさっていた。全世界は、神がソロモンの心に授けられた知恵を聞こうとして、彼に謁見を求めた。」

今日の箇所はソロモン王の知恵のことは何も触れていません。でも23節がヒントになっている。ソロモンがどれほど富んでいたのか詳しく説明すればするほど、彼の知恵がどれだけ富んでいたのかもわかるように書かれている。それで外国の王たちは、こぞってソロモンの知恵を聞こうとしてわざわざ贈り物を持って列をなしていた。

2 王に対する律法(申命記17章16, 17節)

1) 自分のために使う

さて、皆さんはここを読んで心にストンと落ちたか、それとも納得できない思いが残っているか、

どちらでしょうか。何かに気がつきませんでしたか。ヒントは14節です。「一年間にソロモンのところに入って来た金」とある。金はだれのものか。ソロモンのものです。彼は金をどう使ったか。全部自分のために使いました。王なのだから好きなように使っていていいじゃないか、と思うかもしれませんが。でもそうではなかった。

2) 馬を増やしてはならない

申命記17章16, 17節を読みます。「ただし王は、決して自分のために馬を増やしてはならない。馬を増やすために民をエジプトに戻らせてはならない。主は「二度とこの道に戻ってはならない」とあなたがたに言われた。また王は、自分のために多くの妻を持って、心がそれることがあってはならない。自分のために銀や金を過剰に持ってはならない。」

神は、馬を手に入れるためにエジプトに行つてはならないと警告していました。でも、ソロモンはエジプトに買い付けに行かせていました。明らかに律法に反しています。ソロモンは申命記のこのみことばを知らなかったのか。そんなはずはありません。彼は知恵に富んでいますから記憶力も抜群です。モーセ五書をすべて暗記していたと思います。

3) 金を過剰に持ってはならない

神はまた、王は自分のために金を過剰に持ってはならないとも警告していました。輸入した金を国民の福祉のために使いましたというのなら良かったでしょう。でもソロモンは全部自分のために使つて独り占めした。もし皆さんがイスラエルの国民だったらどう感じますか。かつてある国の大統領夫人は、貧しい人たちが沢山いるような国で一千足とも三千足とも言われる靴を持っていたそうです。それがわかったとき、国民から大きな非難を浴びました。

ソロモンも同じです。今はまだ表立った動きはありませんが、国民の間ではだんだん不満がくすぶっていきます。それがやがて国を揺るがすような大きな事件に発展していきます。神の警告知っていながら、あの知恵に富んでいたソロモンは律法を守らなかった。このことをイエスはどのように評価しておられたか、次に見てまいります。

3 イエス・キリスト

1) 栄華を極めたソロモン

イエスはマタイの福音書6章29、30節でこう語ります。「わたしはあなたがたに言います。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも装っていませんでした。今日あつてもあすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこのように装ってくださるのなら、あなたがたには、もっと良くして下さらないでしょうか。信仰の薄い人たちよ。」

イスラエルの人々にとってソロモンは、イスラエルの歴史の中で最も輝かしい業績を残した人物として記憶されていました。しかしイエスはそんな常識とは全く正反対のことを言われたのです。ソロモンよりも野の草のほうがはるかにすばらしい。

2) 智恵あるソロモンは真の富を失う

今ちょうど桜の花が咲き、草木が芽吹いて新緑の季節を迎えています。確かにイエスが言われるとおり、野の草は働きもしなければ紡ぎもしない。それなのにこんなに美しく着飾る。神のすばらしさを思わずにはいられません。

でも私たちの心は次の瞬間、別のものに奪われていくのも事実です。もしソロモンの宮殿を見たらどうなるか。野の草木の美しさに感動し、神を賛美する思いはすぐに吹っ飛んでしまうでしょう。金で飾られた装飾品に目が奪われ、心が奪われ、「やっぱりお金がある人は幸せだね」と、うらやむような、ねたむような声が心の奥底から聞こえてくるわけです。

ソロモンはどうだったのか。確かに彼の初めの信仰はすばらしかった。若くて力がない。何も無い自分であると素直に認め、主により頼んでいました。しかし、莫大な富を手にし、人々がソロモンはすばらしいとほめそやすようになったとき、いつしか主を忘れてしまい、自分の知恵に頼るようになり、聖書のみことばを軽んじていきます。

イエスが指摘されたのはこのことでした。どんなに栄華を極めたとしても、もし主を忘れてしまうならば、野の草花の美しさに到底及ぶことができない。そのように言われました。

3) 明日は炉に投げ込まれるゆりの花でさえ

「だから忘れないようにしましょう」ということは簡単です。ソロモンでさえ忘れてしまったのですから、私たちはなおさらです。どうすればよいのでしょうか。最後にそのことを見ておきます。

「野の花」と訳されているところは、「ゆり」とも訳されることばです。ソロモンが神殿が建てた神殿の玄関には二本の大きな柱があって、その柱の上にはゆりの花の形が彫られてあったことから、

以前のメッセージで、このゆりの花は救いのシンボルであると語ったことがあります。

もしそうであれば、明日は炉に投げ込まれる野の花、ゆりの花は何を指すのか。イエス・キリストの十字架のことではないでしょうか。ソロモンは、金と馬で自分を飾ろうとして、主の御心から離れて行きました。でも主イエスは、自分を飾ろうとするのではなく、むしろ私たちがいのちのことで心配することのないようにと、まるで野の花が炉に投げ込まれるようにしていのちをお捨てになりました。

いったいどこに本当の富があるのでしょうか。この世界では、働きもせず、紡ぎもしないとあれば、なんと言われるか。何かをする者は価値があり、何もしない者は価値がない。そう言われる世界です。

しかし神は違います。何もしなくても、何もできなくても、神は平等に美しく飾って下さる。私たちはそれに気がついていない。

ですから、主は言われるのです。あなたがたは、ソロモンの道をたどる必要がない。明日炉に投げ込まれるゆりの花を見なさい。それでも神は美しく飾ってくださっているではないか。ゆりの花は焼かれておしまいですか。そうではない。ゆりの花であるイエスは、墓の穴からよみがえられたのではないですか。あなたがたは、すでにこの恵みを神からいただいているのです。それはどれほどの価値なのか。それに比べたら、ソロモンが持っていた富など実につまらない。それほどの価値。だからどうして思い悩むのか。

主を忘れてしまいがちな私たちですが、このようにして下さる主を思い起こしたいと願います。